HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イタリア語とルーマニア語の定冠詞に関する対照研究
Author(s)	藤田, 健
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 158, 77(左)-115(左)
Issue Date	2019-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.158.l77
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75220
Type	departmental bulletin paper
File Information	158_10_Fujita.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究院紀要 158 （2019）

イタリア語とルーマニア語の定冠詞に関する対照研究

藤　田　　健

1. 序論

特定の言語現象を複数の言語間で比較対照し，それぞれの言語の特異性と各言語に共通する普遍性を明らかにする言語学の領域は，一般に対照言語学と呼ばれている。筆者はこの対照言語学の手法を用いて，インド・ヨーロッパ語族の一派であるロマンス諸語における定冠詞の分布に関する研究を進めてきたが，本稿はその一環としてイタリア語とルーマニア語についての考察を行うものである。

冠詞は，この文法カテゴリーを有する言語において，名詞句において極めて重要な文法的役割をはたす。その中でも，ロマンス諸語は冠詞体系が発達している言語群であると言えるが，個々の冠詞の機能については言語間で差異が観察される場合がある。イタリア語は同グループの中でも，冠詞の体系化が比較的進んでいる言語であると言える。これに対し，ルーマニア語は冠詞が他のロマンス諸語には見られない形態統語的な特徴を有しており，それが分布にも影響している。イタリア語の冠詞については様々な観点から研究が進められているが，ルーマニア語に関してはあまり行われておらず，両言語間の対照的視点からの研究となると皆無と言ってよいのが現状である。

冠詞の中でも，定冠詞は多くの機能を有し，最も使用頻度が高い要素である。定冠詞の機能を考察する上では，定の決定詞としての位置づけが極めて重要であり，定の決定詞全体の中で定冠詞の分布･機能を考察することによっ

10.14943/bfhhs.158.l77

て，はじめて明らかになる本質が存在する。本稿では，イタリア語とルーマニア語の定冠詞の機能を対照的に考察すべく，その分布を詳細に観察し，指示形容詞や所有形容詞といった他の定の決定詞との対応に焦点をあてて分析を進めていく。これにより，定冠詞・不定冠詞・部分冠詞という冠詞体系内のみでの考察ではとらえられない定冠詞の特質を明らかにする[1]。

また，本稿は，筆者がこの四年間に進めてきたフランス語・イタリア語・スペイン語・ルーマニア語の定の決定詞に関する対照研究において，最後の論考として位置付けられるものである。この対照研究は，2010 年に開始したロマンス諸語における冠詞の対照研究を発展的に展開したものであるが，その最大の特徴は分析手法として文学作品の翻訳をコーパスとして採用した点にある。この翻訳を用いた対照研究は近年その数を増しているが，その大きな利点としてインフォーマントによる作例の判断では明らかにできない，各言語の個別的特異性，いわば「癖」を見抜くことが可能となる点があげられよう。この手法を採用することによって一定の成果を得るに至ったことから，今まで行った一連の研究の総括として，特に定冠詞と他の決定詞との対応関係について各言語の個別的特徴を最後に提示する。

2．両言語における定冠詞の位置づけ

ここでは，イタリア語とルーマニア語の定冠詞が従来どのように分析され，どのような形で位置づけられてきたかを見るために，先行研究を概観する。

2.1．イタリア語

イタリア語は，三つのカテゴリーからなる冠詞体系をもつと考えられている。すなわち，定冠詞・不定冠詞・部分冠詞である。

Andorno（1999）によると，定冠詞は，話者と聞き手（ascoltatore）が知っ

[1] 本研究は，平成 30 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号 15K02465）による研究成果の一部である。

ている，あるいは同定可能（identificabile）であると話者（parlante）が認識している，定の指示を持つ名詞に伴う（p. 35）。既知，もしくは同定可能である理由としては，本質的（intrinseco）なもの，テクストによるもの，語用論的なものがあげられている。

(1) Ho comprato una gonna e una giacca. La giacca mi va stretta.
I bought a skirt and a jacket the jacket me goes tight
“私はスカートと上着を買った。その上着は私にはきゅうくつだ。”

またこれとは別に，個体ではなく，クラス全体を指示する名詞にも伴う（p. 36）。Sensini（1997: p. 69）や Dardano and Trifone（1997: p. 150）が述べているように，これは物質や抽象的概念の場合にも適用できる。

(2) a. I ragazzi devono praticare qualche sport.
the boys should practice some sport
“少年は何かスポーツをするべきだ。”
b. Il petrolio non è inesauribile.
the petroleum not is inexhaustible “石油は無尽蔵ではない。”
c. La pazienza è una gran virtù.
the patience is a great virtue “忍耐は大いなる美徳である。”

Sensini は，未知のものであっても指示対象を特定化する機能を持つ表現を伴うときに定冠詞が用いられる用法や，特定の文脈において指示形容詞・指示代名詞・配分の意味をもつ不定形容詞・時の限定要素としての機能についても言及している（p. 69）。

(3) a. Il centro di Milano è sempre molto affollato.
the center of Milan is always very crowded
“ミラノの中心部はいつもとても込み合っている。”

b. Entro la settimana sapremo i risultati delle analisi.
within the week we will know the results of the analyses
“今週のうちに我々は分析結果を知ることになる。”

c. Dei due fratelli preferisco il più giovane.
of the two brothers I prefer the younger
“二人の兄弟のうち，私は弟の方が好きだ。”

d. Il lunedì pomeriggio vado in piscina.
the Monday afternoon I go to pool
“毎週月曜日の午後私はプールに行く。”

e. Il mese scorso sono stato a Londra.
the month last I was in London
“先月私はロンドンにいた。”

Renzi et al.（2001）は，これらに加えて所有物を示す定冠詞の機能を指摘している（p. 400）。これは譲渡不可能所有でも譲渡可能所有でもありうる。前者の場合は所有形容詞との交替は不可能であるのに対し，後者では可能である。

(4) a. Mi fa male la testa.
me makes pain the head “私は頭が痛い。”

b. Abbiamo perso le valigie.
we have lost the suitcases
“私たちはスーツケースを失くした。”

(5) a. *Mi fa male la mia testa.
me makes pain my head

b. Abbiamo perso le nostre valigie.
we have lost our suitcases
“私たちは私たちのスーツケースを失くした。”

2.2. ルーマニア語

ルーマニア語の定冠詞は，他のロマンス諸語とは異なる形式と機能を有している。以下にその特徴を概観する。

2.2.1. 形式

ルーマニア語の定冠詞は，名詞に先行するのではなく，前接語（enclitic）として名詞に後続するという形態的特徴をもつ。定冠詞が名詞に後続している名詞形式は定冠詞形と呼ばれる。他のロマンス諸語とは異なり，ルーマニア語には主格・対格と属格・与格の形態的対立が人称代名詞のみならず名詞にも存在し，定冠詞も名詞の格に応じて変化する[2]。さらに，名詞の性として男性・女性の他に中性があるため，形式がより複雑になる。以下に代表的な例を示す。

(6)

	単数無冠詞	単数定冠詞 主格・対格	単数定冠詞 属格・与格	複数無冠詞	複数定冠詞 主格・対格	複数定冠詞 属格・与格
男性	prieten 「友人」	prietenul	prietenului	prieteni	prietenii	prietenilor
女性	masă 「テーブル」	masa	mesei	mese	mesele	meselor
中性	tren 「電車」	trenul	trenului	trenuri	trenurile	trenurilor

これに加えて，ルーマニア語には独特の冠詞が存在する。一つは指示冠詞（articolul demonstrativ）もしくは形容冠詞（articolul adjectival）と呼ばれる形式で，様々な機能を持つが[3]，代表的な機能の一つとして，形容詞の最上級の形成があげられる。これは，イタリア語の定冠詞がはたす機能と共通している。

[2] 厳密には呼格も存在するが，ルーマニア語の格体系においては周辺的であると考えられるため，本稿では省略する。

(7)　cei　mai　bogaţi oameni
　　指示冠詞 more　rich　men　“最も裕福な人々”

もう一つは所有冠詞（articolul posesiv）と呼ばれる形式で，代表的な機能として，定冠詞形でない名詞に属格形名詞が修飾要素として後続する場合に，両者を連結する機能があげられる。この場合，所有冠詞は先行する名詞と性数一致する。

(8)　un　avion　al　companiei　TAROM
　　a　plane（男性）所有冠詞（男性形）company’s-the
　　“タロム社の航空機“

この機能はイタリア語の定冠詞には存在しない。これに対して，共通する機能と考えられるのは，以下のように，後続する所有形容詞とともに所有代名詞の働きをするというものである。

(9)　Ceasul　este　al　meu.
　　watch-the　is　所有冠詞 mine　“その時計は私のものだ。”

このように，ルーマニア語の指示冠詞と所有冠詞は，必ずしもイタリア語の定冠詞と同じ機能をはたすわけではないが，共通する機能も見られる。本稿ではイタリア語との対照言語学的観点から，共通する機能についてはこの二つの冠詞を定冠詞と同等に扱うものとする[4]。

---

[3] その他に代表的な機能として，形容詞や「前置詞 de ＋名詞・代名詞」に先行してこれらの要素を名詞化したり，定冠詞形名詞に後続する形容詞に付加されて特定性を表す機能などがある。

a.　cel　mic　　b.　maşina　cea　albastră
　　指示冠詞 small “小さいもの”　　car-the 指示冠詞　blue　“その青い車”

前者の機能はイタリア語の定冠詞にも見られるが，後者は見られないものである。

2.2.2. 機能

定冠詞を含む冠詞（以下定冠詞類と呼ぶ）の機能を詳細に提示したものとして，Panã Dindelegan（2003）があげられる。ここでは，これに従い，定冠詞類の様々な機能を概観する。

まず重要な機能としてあげられるのは，意味機能である。それは名詞の現働化（actualizare），すなわち個別化（individualizare），決定（determinare）であり，名詞によって指示される対象のクラスを対話者にとって既知である，あるいは同定可能である対象に限定することである。この個別化の機能には，照応的（anaforic）機能と直示的（deictic）機能がある（pp. 33–34）。（10）の a が照応的機能の例で，b が直示的機能の例である。

（10） a . Am primit un câine. Câinele mi–a făcut mare plăcere.
I received a dog dog–the me made big pleasure
“私は一匹の犬を迎え入れた。その犬は私に大いなる喜びを与えた。”

b . Dă–mi cartea!
give–me book–the
“（ジェスチャーで示しながら）その本をちょうだい。”

定冠詞の機能を複雑にしているのが，個別化とは相反するいわゆる総称的（generic）解釈である。この解釈はどのような統語的位置においても可能である（p. 34）。

（11） a . Câinele este un animal devotat omului.
dog–the is an animal faithful to–man–the

[4] Guillermou（1953），Goga（2001），Panã Dindelegan（2003），Negritescu and Arrigoni（2014）では指示冠詞と所有冠詞を定冠詞とは区別しているが，Lombard（1974）はこの二つを定冠詞の一種とみなしている。この文献はフランス語で書かれていることから，フランス語の定冠詞と共通の機能をもつ点を重視したためであると考えられる。

“犬は人間に忠実な動物だ。”

b. Ador câinele pentru devotamentul lui.
I like dog-the for devotion-the its
“私はその忠実さゆえに犬が大好きだ。”

c. În componenţa lui GN, apare un adjectiv[5].
in construction-the of NP appears an adjective
“名詞句構造の中に形容詞は現れる。”

指示冠詞・所有冠詞に関しては，個別化の機能を有しているという点については疑問が残るとしている。指示冠詞は，指示的なニュアンスを加えることによって定冠詞の決定の機能を強める。省略されても意味的な情報は失われず，強調の意味が失われるだけである（pp. 35-36）。

(12) a. caietul cel nou b. caietul nou
notebook-the 指示冠詞 new notebook-the new
“その新しいノート” “新しいノート”

所有冠詞は決定の機能は持たず，統語的に省略は不可能である。定冠詞，不定冠詞，無冠詞名詞のいずれとも共起する。

(13) a. Este cetăţeanul cel mai devotat al României.
he is citizen-the most faithful 所有冠詞 Romania
“彼はルーマニアの最も献身的な市民だ。”

b. Este un cetăţean al României.
he is a citizen 所有冠詞 Romania
“彼はルーマニアの一市民だ。”

[5] (11c) のように属格もしくは与格名詞を伴う名詞につく定冠詞は個別化の解釈も可能である。すなわち，先行文脈で言及している要素を指す解釈である。

c．Este cetăţean al Românieі.
he is citizen 所有冠詞 Romania
“彼はルーマニアの市民だ。”

意味的な要因ではなく，統語的な要因で冠詞が生起不可能な場合がある。修飾要素を伴わない名詞が前置詞に支配される場合，定冠詞は生起しない（p. 36）。

(14) a．Merg la Universitate.
I go to university “私は大学に行く。”
b．Pun cartea pe masă.
I put book-the on table
“私はその本をテーブルの上に置く。”

これに対して，修飾要素が名詞に後続する場合には定冠詞が生起する。また，例外的に前置詞 cu は定冠詞を伴う名詞句を選択する。一部の人間を表す名詞も定冠詞を伴って生起する。

(15) a．pentru profesorul nostru
for teacher-the our “私たちの先生のために”
b． cu prietenii
with friends-the “友達と一緒に”
c．pentru mama
for mother-the “母のために”

定冠詞が他の語彙的要素と共起して個別化を行うこともある。所有形容詞・指示形容詞と共起する定冠詞，所有冠詞，指示冠詞がその例である[6]。複数の冠詞が共起する場合もある（pp. 36-37）。

(16) a. elevul meu
pupil-the my “わたしの生徒”
b. acest elev al meu
this pupli 所有冠詞 my “この私の生徒”
c. copilul acesta
child-the this “この子供”
d. copilul acesta al meu
child-the this 所有冠詞 my “この私の子供”
e. colegul meu cel nou
colleague-the my 指示冠詞 new “私の新しい同僚”

ルーマニア語の冠詞が担う重要な機能として，性・数を標示する機能に加え，他のロマンス諸語には見られない形態的機能がある（pp. 39–41）。すなわち，名詞の格を標示する機能である。通常は定冠詞は名詞に付加されるが，形容詞が名詞に先行する場合，形容詞に付加される。

(17) plecarea ciudatului oaspete
departure-the of-strange-the guest “妙な客人の出立”

この機能は，他のロマンス諸語のもつ分析的（analitic）な性質とは異なり，ルーマニア語がラテン語の総合的（sintetic）な屈折形態を保持していることによるものである。

指示冠詞も格変化をするが，単独ではなく定冠詞とともに二重に格を標示する。

---

[6] 指示形容詞や所有形容詞が名詞に先行する場合には定冠詞は生起しない。この場合，所有形容詞は所有冠詞を伴う。
a. acest elev b. al meu elev
this pupil “この生徒” 所有冠詞 my pupil “私の生徒”

(18)　elevului　celui　bun
　　of-pupil-the 指示冠詞 good　“そのよい生徒の”

所有冠詞はそれ自体は格変化をしないが，後続する名詞が与格ではなく属格であることを明示する機能をもつ。これは，ルーマニア語では属格と与格が同じ形式で標示されるため，属格であることを特に示さなければならない場合に有効である。

(19)　a．echipe aparţinătoare clubului　Dinamo
　　team　belonging　to-club-the（与格）
　　“ディナモクラブ所属のチーム”
　　b．echipe câştigătoare　ale　cupei
　　team　winning　所有冠詞 cup-the（属格）
　　“優勝杯を手にしたチーム”

以上のことから，イタリア語とルーマニア語の定冠詞は，意味的機能に関しては共通していると言えるが，格標示という形態的機能に関しては異なっている。更に，イタリア語の定冠詞の機能の一部は，ルーマニア語に特有の冠詞である所有冠詞や指示冠詞が担っているという点に留意する必要がある。

3．両言語における定冠詞の対応関係

本稿では，文学作品の原典とその翻訳を用いて両言語の定冠詞の分布を観察する。分析資料として用いるのは，フランス人作家アンドレ・マルロー（André Malraux）作の「人間の条件」のイタリア語訳（La condizione umana, A. R. Ferrarin 訳）とルーマニア語訳（Condiţia umană, Irina Eliade 訳）の一部である。一方の言語のテクストにおいて生起する定冠詞が，もう一方の言語のテクストにおいてどのような形式で対応しているかを調べ，数値に

よってその傾向を示す。

3.1. イタリア語の定冠詞のルーマニア語における対応表現

本節では，イタリア語の定冠詞がルーマニア語においてどのような形式で対応しているかを観察する[7]。結果は以下のとおりである。

イタリア語テクストにおける定冠詞のルーマニア語における対応[8]

ルーマニア語においても定冠詞で現われているもの	2390（75.0）
ルーマニア語において指示形容詞で現われているもの	42（ 1.3）
ルーマニア語において所有形容詞で現われているもの	49（ 1.5）
ルーマニア語においてゼロ冠詞で現われているもの	585（18.4）
ルーマニア語において不定冠詞で現われているもの	81（ 2.5）
ルーマニア語において上記以外の表現で現われているもの	40（ 1.3）
総数	3187（ % ）

これを，異なる形式で現われているもののみに注目して分布を比較すると，以下のようになる。

ルーマニア語において指示形容詞で現われているもの	42（ 5.3）
ルーマニア語において所有形容詞で現われているもの	49（ 6.1）
ルーマニア語においてゼロ冠詞で現われているもの	585（73.4）
ルーマニア語において不定冠詞で現われているもの	81（10.2）

[7] 本稿では，言語間の対応を見るために，一方のテクストにおいて生起する定冠詞を含む名詞句に，もう一方のテクストにおいて対応表現が見られない例は集計に含めていない。従って，テクストにおける定冠詞の実際の生起数はより大きいものとなる。

[8] 表中の百分率は，小数点以下第２位を四捨五入した数値である。従って，百分率の合計が100％にならない場合もある。

ルーマニア語において上記以外の表現で現われているもの	40（ 5.0）
総数	797（ % ）

前節で見たように，両言語において定冠詞がはたす意味機能に共通点が多いという事実を考慮すると，一方の言語における定冠詞が他方の言語においても定冠詞で対応する場合が多いことが予想される。ここで注目すべきは，ゼロ冠詞が対応する例の割合が極めて高いという点と，指示形容詞が対応する例の割合が低いという点である。ゼロ冠詞は定性という観点からは不定と位置付けられるもので，定である定冠詞とは対立する要素であるとみなすことができる。それにもかかわらず対応例が多いという事実は，定冠詞とゼロ冠詞について何らかの考察が必要となることを示唆している。この点については，4.1 節で論じることとする。

指示形容詞は，定性という観点からは定冠詞と同じく定と位置付けられる要素である。定冠詞と共通する性質を有することから，一定数の対応が見られることも予想されるが，実際には全体の 1.3%と低い割合でしか現れない。これは，イタリア語の定冠詞とルーマニア語の指示形容詞の間で，機能の共通性よりも相違点が際立っているためであると考えられる。この点について論じるには，ルーマニア語の定冠詞とイタリア語の指示形容詞の対応についても考慮に入れなければならないため，4.4 節で扱うこととする。

また，不定冠詞への対応は全体の 2.5%となっている。定性に関して定冠詞と対立する要素であることから当然低いことが予想されるが，この数値は一定数の対応があることを示している。これについても後に考察することとする。

所有形容詞への対応についても，1.5%と低い割合でしか見られない。この事実は，イタリア語の定冠詞とルーマニア語の所有形容詞との間に機能的共通性が少ないことを示していると言える。所有形容詞は名詞が指示する対象の所有者を示す要素であり，論理的には定性に関して定・不定の両方がありうるが，ルーマニア語では所有形容詞は定冠詞と共起する。

(20) a. cărţile mele
books-the my “私の本”
b. copiii noştri
children-the our “私たちの子供”
c. paharele voastre
glasses-the your “君たちのコップ”

このため，ルーマニア語の所有形容詞はイタリア語の定冠詞と定性に関して同じクラスに位置づけられる。そもそも所有形容詞は所有者を示すという機能がその本質的特徴であるのに対して，定冠詞は意味的に希薄な要素であるため，人称という独自の意味を持つ所有形容詞とは区別されて当然である。イタリア語の定冠詞には所有者を指示する機能が限られているために，ルーマニア語の所有形容詞との対応が少ないと考えることができる[9,10]。

3.2. ルーマニア語の定冠詞のイタリア語における対応表現

本節では，ルーマニア語の定冠詞がイタリア語においてどのような形式で対応しているかを観察する。結果は以下のとおりである。

ルーマニア語テクストにおける定冠詞のイタリア語における対応

イタリア語においても定冠詞で現われているもの	2390（83.2）

[9] 2.1でも述べたように，イタリア語の定冠詞にも，所有形容詞と共通する機能をもつと考えられる例が存在する。
Si è lavato la faccia.
he himself washed the face “彼は顔を洗った。”
譲渡不可能な名詞句に定冠詞が添えられた場合，文の中に生起する要素が所有者として解釈される。このような機能は，4.3で述べるようにルーマニア語の定冠詞も共有することから，場合によってイタリア語とルーマニア語の両言語において定冠詞が用いられることになる。

[10] ルーマニア語の定冠詞とイタリア語の所有形容詞の対応については異なる傾向が観察される。これに関しては4.3で考察する。

イタリア語において指示形容詞で現われているもの	37（ 1.3）
イタリア語において所有形容詞で現われているもの	146（ 5.2）
イタリア語においてゼロ冠詞で現われているもの	247（ 8.6）
イタリア語において不定冠詞で現われているもの	38（ 1.3）
イタリア語において上記以外の表現で現われているもの	14（ 0.5）
総数	2872（ % ）

これを，異なる形式で現われているもののみに注目して分布を比較すると，以下のようになる。

イタリア語において指示形容詞で現われているもの	37（ 7.7）
イタリア語において所有形容詞で現われているもの	146（30.3）
イタリア語においてゼロ冠詞で現われているもの	247（51.2）
イタリア語において不定冠詞で現われているもの	38（ 7.9）
イタリア語において上記以外の表現で現われているもの	14（ 2.9）
総数	482（ % ）

イタリア語の定冠詞とルーマニア語の対応表現の場合とを比較すると，イタリア語におけるゼロ冠詞の対応例の割合がより低い点と，イタリア語における所有形容詞の対応例の割合がかなり高くなっている点が顕著である。指示形容詞については，イタリア語において指示形容詞で現われている例（1.3%）がルーマニア語において指示形容詞で現われている例（1.3%）とほぼ同じ割合になっているが，両者とも相対的には低い数値である。また，不定冠詞の対応例については，イタリア語では 1.3%であるのに対してルーマニア語では 2.5%となり，後者が若干高くなっている。次節では，それぞれの対応例について考察を進めていく。

4．定冠詞が異なる形式に対応する例の分析

本節では，一方の言語における定冠詞が他方の言語において別の形式で対応する例について，形式ごとに分けて分析を進めていく。

4.1．イタリア語の定冠詞　→　ルーマニア語のゼロ冠詞

イタリア語の定冠詞がルーマニア語においてゼロ冠詞で現われている例は，585 例あり，全体の 18.4％を占めている。この中で，圧倒的に多いのはルーマニア語において前置詞の目的語となっている場合で，510 例あり，全体の 87.2％を占める[11]。

(21)　a．Chen era davanti allo specchio interno della cabina.（I p. 32）
was opposite to the mirror interior of the cabin
b．Cen se afla în faţa oglinzii din ascensor.（R p. 28）
was opposite mirror-the of elevator
“チェンはエレベーターの中の鏡に向き合っていた。”

これは，2.2.2 で見たように，修飾要素を伴わない名詞が前置詞に支配される場合に定冠詞が生起しないというルーマニア語固有の統語的制約によるものである。なお，Panã Dindelegan（2003）は前置詞 cu が例外的に定冠詞を伴う名詞句を選択すると指摘していたが，cu が無冠詞名詞句を選択している例も 18 例見られた。以下に一例を示す。

(22)　Katov dădu din umeri, ca şi cum ar fi vrut
gave from shoulders as if (he) would have wanted

[11] 例文にはテクストにおいて現れるページを示している。

să dea să se înţeleagă că planul se impunea
that (he) give that it is understood that plan-the is necessary
cu evidenţă.（R p. 36）
with clearness
“カトフはその計画は明らかに必要であるのは言うまでもないということを示すかのように肩をすくめてみせた。”

この事実は，前置詞が無冠詞名詞句を好むという傾向がルーマニア語において極めて高いということを示している。

前置詞の目的語に次いで多いのは直接目的語で 36 例あり，6.2%を占める。

(23) a. E pensare che quegli imbecilli preparavano
and thinking that those foolish were preparing
le armi che avrebbero impugnato i loro nemici.（I p. 31）
the weapons that would take up their enemies
“あの愚か者たちは，自分たちの敵が手にする武器を作っていたんだと考えるとね。”

b. Cînd te gîndeşti că nişte muncitori imbecili fabricau
when you think that some workers foolish produced
arme, destinate să-i omoare pe cei care luptau
weapons intended that kills those who were fighting
pentru ei!（R p. 26）
for them
“愚かな労働者たちが，自分たちのために闘ってくれる人間を殺す武器を作ったんだと考えるとね。”

これに倒置主語の 12 例（2.1%），主語の 10 例（1.7%）と続く。

(24) a. A quell' ora non c'erano che le teste tagliate nelle
at that hour not there were than the heads cut in the
gabbie ancora nere ... (I p. 44)
cage still black
"だがその時刻には，まだ黒い籠に入った切られた首しかなかった。"

b. Acum, în toiul nopţii, nu se aflau pe străzi
now in midst-the of night-the not was on streets
decît capete tăiate în cuşti negre, ... (R p. 42)
than heads cut in cage black
"この真夜中の今，通りには黒い籠に入った切られた首しかなかった。"

(25) a. I rinforzi che difendevano Shangai contro i
the reinforcements that defended against the
rivolzionari venivano da Nanchino: (I p. 42)
revolutionists were coming from Nanjing

b. Întăriturile care aveau să apere Shanghaiul de
reinforcements that had to defend Shanghai from
revoluţionari soseau din Naejingh. (R p. 40)
revolutionists were arriving from Nanjing
"革命軍から上海を守る増援隊が南京から到着するところだった。"

倒置主語を含む主語と直接目的語が一定数見られるのは，省略されない限り必ず完全な文において存在する要素であるという主語の性質と，他動詞文においてはほぼ必ず生起するという直接目的語の性質を考慮すると当然である。しかし，直接目的語の方が主語よりも多いという事実は，後者のみをもつ自動詞文の存在を考えると一考の価値があると言えよう。

その一つの要因として考えられるのが，両者が文において占める構造的位

置の違いである。直接目的語は言うまでもなく他動詞によって選択される要素であり，他動詞と直接目的語は統語的にも意味的にも一つのまとまりとして機能する動詞句を形成する。このため両者の結びつきが強くなり，ある程度固定化された動詞句表現として用いられることもある。表現として固定化されると，名詞の指示性が低くなり，冠詞が脱落するという傾向が一般に見られる。実際に見られた用例としては，a acorda credite「信用貸しをする」，a avea mîini frumoase「美しい手をしている」，a avea nevoie「必要とする」，a avea noroc「運がある」，a avea timp「時間がある」，a da foc「火をつける」，a da ordin「命令を出す」，a cere bani「お金を求める」，a fabrica arme「武器を製造する」，a face apel「訴える」，a face dragoste「愛し合う」，a face semn「合図をする」，a juca biliard「ビリヤードをする」，a împlini opt ani「8歳になる」，a împrumuta fonduri「資金を貸し出す」，a lua armea「武器を取る」，a organiza uniuni「協会を組織する」，a primi comenzi「命令を受ける」，a plăti chirie「家賃を払う」，a vorbi francezā「フランス語を話す」などがあり，動詞と名詞が固定的に結びつき，特定の概念を表す表現となっている。これに対して，主語という要素は統語的に動詞句の外にあると分析されることが多いように，固定化された熟語表現の一部を形成することは多くはない[12]。このことが，直接目的語にゼロ冠詞が比較的多く見られるのに対して，主語において相対的に少ないという事実の一つの要因となっていると言えよう。

4.2. ルーマニア語の定冠詞　→　イタリア語のゼロ冠詞

ルーマニア語の定冠詞がイタリア語においてゼロ冠詞で現われている例は，247 例あり，全体の 8.6% を占めている。イタリア語の定冠詞がルーマニア語においてゼロ冠詞で現われている割合は 18.4% であったので，ルーマニア語に比べてイタリア語ではゼロ冠詞の生起する割合が低くなってはいるが，決して無視できない数値であると言える。

[12] 生成文法をはじめとする統語理論において，文の構造において主語が階層的に高い位置に位置づけられることは，このような言語直観を反映しているものと言える。

イタリア語におけるゼロ冠詞の機能について，Renzi et al.（2001）は次のように述べている。単数形では，物質名詞や物質名詞として扱うことのできる抽象名詞の場合に，特定的でない不定の名詞がゼロ冠詞で生起できるとしている。特に直接目的語の場合に頻繁に見られ，動詞に後続する主語の場合にも観察される。動詞に先行する主語の場合には，ゼロ冠詞はまれである[13]。

(26) a. Preferite burro o margarina?
do you like butter or margarine
“バターがいいですか，マーガリンですか？”

b. Si è versato latte.
spilt milk “牛乳がこぼれた。”

数えられる名詞の場合には，特殊な文体を除いて単数形でゼロ冠詞が生起することはない[14]。複数形では，やはり特定的でない不定の名詞が，i）動詞に後続する主語（a），ii）直接目的語（b），iii）前置詞の目的語（c）のいずれかである場合にゼロ冠詞が生起しうると Renzi et al.（2001）は述べている。

(27) a. Ci sono ancora giornali in edicola a quest’ora.
there are still newspapers at shop at this hour

[13] 名詞がある種の修飾要素を伴う場合には，動詞の前でもゼロ冠詞で生起することがある。
Latte di questa qualità è raro.
milk of this type is rare “この種の牛乳は珍しい。”
これは，後述する複数形の場合も同様である。
Amici così gentili sono sempre graditi.
friends so kind are always welcome
“そんなに優しい友人はいつだってありがたいものだ。”

[14] 数えられる名詞が修飾要素を伴った重い（pesante）名詞句として動詞より前に置かれた直接目的語である場合，ゼロ冠詞で生起することがあるが，文語的なスタイルである。また，主語や動詞に後続する直接目的語としてゼロ冠詞で生起する例も見られるが，古典的な文体に限られる。

“この時間だったらまだお店に新聞はあるよ。”

b． Mi ha regalato rose.
he me presented roses “彼は私に薔薇を贈ってくれた。”

c． Lavoravamo per committenti occasionali.
we worked for buyers occasional
“私たちはたまにある注文主のために働いたものだった。”

動詞に先行する主語の場合には，高度に文語的な文体においてのみ許容される。これらの議論をもとにすると，イタリア語においては，数えられる要素すなわち非連続的な要素を指示する名詞の場合，単数形では冠詞の生起が義務的であるのに対し，複数形ではゼロ冠詞が比較的広く観察されると言える。

ルーマニア語では，前置詞句の目的語において無冠詞名詞句が要求されるという統語的要因によるものが大半を占めているが，イタリア語におけるゼロ冠詞が本調査の結果の中でどのような統語的環境において生起しているかを以下で観察する。

統語的分布を見る前に，留意しなければならない点がある。純粋に語彙的な理由でイタリア語ではゼロ冠詞が用いられるのに対し，ルーマニア語では定冠詞を伴う場合である。一つは国名・地名等を示す固有名詞であり，China「中国」，Elveţia「スイス」，Franţa「フランス」，Marii Britanii「英国」，Rusia「ロシア」，Ucraina「ウクライナ」，Parisul「パリ」，Shanghaiul「上海」，Sfintul Augustin「聖アウグスティヌス」，Domnul「主，神」など 16 例見られた。また，不定代名詞 uno「あるもの」もイタリア語では無冠詞なのに対し，ルーマニア語では語彙的に定冠詞を伴わなければならない要素であり，40 例見られた。

これらの例を除いた 191 例で統語的な分布を見ると，最も多いのは前置詞句の 119 例であり，全体の 62.3% を占める。この中で，ルーマニア語において修飾要素を伴っている例に対応するイタリア語の例は 32 例，ルーマニア語において属格となっている例に対応するイタリア語の例は 27 例である。これら二つの対応例は，既に述べたようにルーマニア語固有の形態統語規則

によって定冠詞が要求されるものである。これ以外で顕著な例は，方向を表す「右（イタリア語 destra，ルーマニア語 dreapta）」と「左（イタリア語 sinistra，ルーマニア語 stînga）」を表す名詞が前置詞に後続する場合で，25 例見られた。これらの語は，前置詞の後でも定冠詞形で現れるという点でルーマニア語において例外的な性質をもっていると言える。その他の例は 35 例で，このうちイタリア語でもルーマニア語でも前置詞の目的語となっている例は 21 例のみであった。以下に一例を示す。

(28) a. Cen ha chiuso a chiave. (I p. 38)
closed with key
b. Cen aînchis uşa camerei cu cheia . (R p. 36)
closed door-the of-room-the with key-the
"陳はドアを閉めて鍵をかけた。"

このことから，ルーマニア語の定冠詞形がイタリア語の前置詞の目的語としてゼロ冠詞形で対応する例は，形態統語的な規則や一部の特殊な語彙を除けば比較的限られていると言える。

前置詞の目的語以外の例で比較的多いのは，イタリア語において名詞文で現われているもので，27 例である。

(29) a. Povera piccola! (I p. 61)
poor little
b. Sărăcuţa. (R p. 63)
poor-the "かわいそうに。"

名詞文が全体に占める割合は 22.7%となり，イタリア語の定冠詞がルーマニア語のゼロ冠詞に対応している場合と比較すると，名詞文の割合が高くなっているのが特徴的である。ルーマニア語の統語的規則によって定冠詞が生起する修飾要素を含む名詞句は 1 例のみとなっており，少ない。比較的多

く見られるのが並列表現としての名詞文であり，13 例である。

(30) a. La camera era sempre quella: zanzariera, pareti bianche,
the room was always that mosquito net walls white
rettangolo netto di luce: (I p. 32)
rectangle clear of light

b. Odaia rămăsese aşa cum o lăsase: patul cu
room-the had remained as it he left bed-the with
polog, pereţii albi, un dreptunghi luminat... (R p. 27)
canopy walls-the white a rectangle lightened
“部屋はもとのままだった。かや，白い壁，くっきりした長方形の光。”

さらにそれ以外の例も 13 例見られることから，名詞文についてはイタリア語の方がルーマニア語よりもゼロ冠詞が生起しやすいと言えよう。

総括すると，ルーマニア語特有の形態統語的規則によって定冠詞が要求される文脈においてイタリア語でゼロ冠詞が生起する例や，語彙的な性質によってルーマニア語で定冠詞が生起するものが多く見られるが，それ以外の場合でも前置詞の目的語と名詞文においてイタリア語でゼロ冠詞が生起する傾向がある程度見られる。

4.3. 所有形容詞が対応する場合

ここでは，それぞれの言語の定冠詞に別言語において所有形容詞が対応している例について考察する。ルーマニア語の定冠詞がイタリア語において所有形容詞で現われている例は 146 例で，全体の 5.2%を占めており，かなり高い割合であると言える。ルーマニア語において所有を表す定冠詞がどのような分布になっているかを見るためにこれを文法機能ごとに分けてみると，主なものはルーマニア語における直接目的語 66 例（45.2%），前置詞の目的語 29 例（19.9%），主語 28 例（19.2%，倒置主語 4 例含む），属格名詞句 19

例（13.0%）となる[15]。以下にそれぞれの例をあげる。

I. 直接目的語

(31) a. Întinse mîna. (R p. 33)
he reached hand-the "彼は手を差し出した。"

b. Tese la sua mano quadrata. (I p. 36)
he reached his hand square
"彼はがっしりした手を差し出した。"

II. 前置詞の目的語

(32) a. Rusoaiaca îl privea pe baron cu ochii
Russian woman-the was watching man with eyes-the
larg deschişi încercînd să înţeleagă. (R p. 45)
widely opened trying to understand

b. La russa cercava di capire con tutti i suoi occhi.
the Russian woman tried to understand with all her eyes
(I p. 46)
"ロシア女は目をみはって理解しようとつとめていた。"

III. 主語

(33) a. Degetele puteau încă strînge, dar muşchii
fingers-the could more grip but muscles-the
braţului se înmuiaseră. (R p. 25)
of-arm-the got slack

b. Le sue dita stringevano sempre più, ma i muscoli
his fingers were gripping more and more but the muscles

[15] ここで言う属格名詞句は，イタリア語では前置詞 di によって導かれ，所有を表す名詞句に相当する。

del braccio si rilassavano...（I p. 30）
of the arm got slack
“彼の指はますますきつく握りしめられていったが，腕の筋肉はゆるんでいた。”

IV．属格名詞句

(34) a．Lo sfregamento della sua unghia ricurva su della latta
the scratch of his nail twisted on the tin-plate
fece stridere i denti di Katov;（I p. 42）
made grind the teeth of
“ブリキの上を引っかいている彼の爪の音は，カトフの歯をぎりぎりさせた。”

b．Katov, auzind rîcîitul unghiilor pe metal, începu
hearing scratch-the of-nails-the on metal began
să scrîşnească din dinţi．（R p. 39）
that he gnash from teeth
“カトフは，爪がブリキの上を引っかいているのを聞いて，歯をぎりぎりさせ始めた。”

これに対して，イタリア語の定冠詞がルーマニア語の所有形容詞に対応している例は，既に見たようにわずかに 49 例であり全体の 1.5%に過ぎず，明らかに不均衡が観察される。一方の定冠詞が他方の所有形容詞に対応しているということは，その定冠詞が所有の意味を担っていることを意味する。イタリア語の定冠詞にも所有を表す機能はあるが，基本的に譲渡不可能名詞の場合に限られる。

(35) a．Ha abassato la testa.
he lowered the head “彼は頭を下げた。”

b．　Mi ha legato le mani.
　　he me　tied　the hands　“彼は私の手を縛った。”

これに対してルーマニア語の定冠詞は，譲渡不可能名詞以外の名詞の場合にも所有の機能が見られる[16]。上記の 146 例において用いられている名詞は 119 種類を数え，その中には譲渡可能名詞が 102 種類にも及ぶ。angoasă「苦悩」，armată「軍」，bani「お金」，cauză「理由」，clienţi「客」，dragoste「愛」，document「文書」，echipaj「乗組員」，gest「身ぶり」，gînduri「考え」，lăzi「箱」，magazin「店」，mînie「怒り」，relaţii「関係」，sopuşi「家臣」など，意味的に実に多様な名詞が数多く含まれている。このことから，ルーマニア語の定冠詞はイタリア語のそれと比較し，かなり広い範囲の意味に対応する名詞の所有を表す機能をもっていると考えられる。

ここで，ルーマニア語の統語的特徴として留意しておくべき点を指摘したい。それは，与格人称代名詞と定冠詞形の名詞句が共起し，所有者が与格人称代名詞で表される構文がルーマニア語では頻繁に用いられるという事実である。Negritescu and Arrigoni（2014）はこれを所有の与格と呼び，ルーマニア語に特徴的な構文としている（p. 106）。Lombard（1974）は，ルーマニア語における所有形容詞の使用頻度は西のロマンス諸語に比べて低く，所有の与格の使用頻度がかなり高いと指摘している（p. 124, p. 158）。Guillermou（1953）は，所有される要素がどのような文法機能をもっていてもこの構文が用いられると述べているが（pp. 68–69），Negritescu and Arrigoni は特に直接目的語と主語の場合に使用が顕著であるとする（pp. 106–107）。今回の調査では，この構文に該当する例は 57 例に上った。以下にその一例を示す。

（36）　Dădu drumul　lamei　care　îi　scrijelea　degetele
　　he released　blade-the　that　him penetrated　fingers-the

[16] 譲渡不可能名詞は言語によってさまざまな定義がありうる概念であるが，本稿では身体部位を表す名詞に限定している。

crispate.（R p. 22）
cramped
“彼は痙攣する指の中に刃の背がくいこんでいるかみそりを放した。”

この構文では，文中の先行詞によって束縛される再帰代名詞的機能を与格形代名詞とともに定冠詞形名詞句がはたしていると考えることができる。この構文の存在が，ルーマニア語において被所有物を表す名詞句において所有形容詞の代わりに定冠詞が生起する一つの要因であると言える。

次に，文法機能における分布の偏りについて触れておきたい。当該の対応パターンにおいて極めて高い割合を占めるのが直接目的語である。これは，被所有物の所有者が所有の与格で表される構文において，被所有物を表す名詞句が直接目的語である下位分類が最も一般的であるためである。このパターンに属する例は 47 例である。これに続いて多いのは，前置詞の目的語である。この場合，大半は所有者が主語名詞句で表される。所有者が主語名詞句で表される場合，被所有物は主語以外の要素となるが，主語以外の文法機能で最も多く生起するのは直接目的語と前置詞の目的語であるために，この両者の頻度が極めて高いのである。属格名詞句も比較的多いが，同じ理由である程度の数が観察されると考えられる。

一方，主語名詞句における定冠詞が所有の意味をもつ場合も一定数観察される。これは，すでに述べた与格人称代名詞が所有者を表す構文（8 例，うち倒置主語 3 例）であったり，文脈によって所有者が了解されることが可能となる例である。前者の用法は再帰代名詞的機能，後者は人称代名詞と同様に比較的遠い位置にある要素と同一指示となる代名詞的機能と捉えることができる[17]。このように，所有者が構造上，あるいは文脈上明らかな場合において，ルーマニア語では定冠詞が被所有物を表す名詞句を決定する機能がかなり広い範囲でみとめられると言える。

[17] 生成文法の観点からは，再帰代名詞的機能は照応表現（anaphor），代名詞的機能は代名詞表現（pronominal）にそれぞれ対応するものである。

最後に，所有を表す機能について，イタリア語の定冠詞との違いに触れておきたい。3.1 節で述べたように，イタリア語では定冠詞が所有を表す機能は限られており，定冠詞と所有形容詞が対応する比率で見ると，イタリア語の定冠詞―ルーマニア語の所有形容詞は 1.5% であるのに対して，ルーマニア語の定冠詞―イタリア語の所有形容詞は 5.2% とかなり異なる数値となる。これは，ルーマニア語の定冠詞がイタリア語に比して所有の機能をもつ頻度が高いことを意味しているが，この原因として両言語の所有形容詞の統語的な特徴があげられる。ルーマニア語の所有形容詞は 3.1 節で述べたように名詞に後続する位置に生起するのに対して，イタリア語の所有形容詞は定冠詞と同じく名詞に先行する位置に生起する場合が圧倒的に多い[18]。

(37) a. il suo nome　　b. un mio amico
　　the his name　　a my friend

このことは，所有形容詞の占める統語的位置が通常の形容詞と同じく，名詞句内で焦点が置かれやすい位置であることを意味している。このため，ルーマニア語の所有形容詞はイタリア語の所有形容詞よりも情報的に重要な位置を占める場合に用いられるのに適しており，それ以外の場合には不向きな要素であると言える。従って，所有者の情報的価値がそれほど高くない場合，例えば文脈から容易に理解される場合には統語的により軽い要素，すなわち決定詞の位置を占める定冠詞が所有形容詞の代用として用いられると考えられる。すでに述べた，与格人称代名詞が所有者を表す用法が頻繁に用いられることも，ルーマニア語におけるこの傾向を強めていると言える。

4.4. 指示形容詞が対応する場合

3.1 節で述べたように，イタリア語の定冠詞がルーマニア語の指示形容詞

[18] イタリア語の所有形容詞も通常冠詞とともに用いられるが，不定冠詞と共起する場合もあり，定性は指定されていない。

に対応している例は，全体の 1.3% と極めて低い割合となっている。この傾向は 3.2 節で述べたように，ルーマニア語の定冠詞がイタリア語の指示形容詞に対応している例の場合にも同様に見られる（1.3%）。以下にそれぞれの言語において指示形容詞が対応している例を示す。

I. イタリア語の定冠詞がルーマニア語の指示形容詞に対応している例

(38) a. ... non esistevano più davanti alla fatalità che scolora le
not existed more in front of the fate that fades the
forme di cui i nostri sguardi sono saturi.（I p. 63）
forms of which our looks are tired

b. Nimic din tot ce existase nu mai putea lupta cu acea
nothing of all that existed no longer could fight with that
fatalitate care decolorează lucrurile şi fiinţele private
fate that fades things and persons watched
prea mult.（R p. 65）
too much
“そうしたすべても，我々の目が十分に見てきた形を色あせたものにする宿命の前では，存在しないも同然だった。”

II. ルーマニア語の定冠詞がイタリア語の指示形容詞に対応している例

(39) a. Trebuia să privească trupul. Şi capul.（R p. 22）
it is necessary to watch body-the and head-the

b. Occorreva vedere quel colpo. Vederlo, e vedere quella
it is necessary see that body see it and see that
testa;（I p. 28）
head
“その肉体を見なければならなかった。肉体を見，その顔を見なければならない。”

定冠詞と指示形容詞は，定性という観点からは定という性質を共有しているが，定性以外の点で両者の機能が明確に区分され，その区分が両言語において共通しているためにこのような傾向が見られると考えられる。

Dardano and Trifone（1997）によると，イタリア語の指示形容詞は，ヒトあるいはモノを空間，時間，談話における遠近の関係によって決定する。その機能は，ものを指す仕草のように「指し示す」ことであり，談話ではしばしば人差し指を伸ばして行われる。これが直示的機能である（p. 212）。Sensini（1997）も指示形容詞は，話者や聞き手を基準にして，ヒトやモノの空間，時間，談話における位置を示すとする（p. 160）。Serianni（1997）は，モノを現実の空間や想定上の空間の中で指示する直示的機能のほかに，指示詞はすでに言及されたヒトやモノを指示する前方照応的機能と，後に言及するヒトやモノを指示する後方照応的機能をもつと指摘する（p. 195）。

Leeman（2004）は，定冠詞とそれ以外の定の決定詞の相違点として，前者には特徴づけという機能がない点をフランス語について指摘している。これは他の言語についても当てはまると考えられる。指示形容詞は，直示的機能に代表されるように，極めて指示性の高い要素であり，この指示性の高さによって特徴付けを行っていると言える。これに対して定冠詞は，談話において既に導入されているなどの理由によって，聞き手が名詞句の指示対象を容易に特定できるような状況において用いられる決定詞である。

同様の特徴はルーマニア語においても成立し，指示性という観点からは両言語において共通の位置づけがなされていると考えられる。このために，定冠詞との対応については低い割合でしか生起しないという結果となっていると考えられる。

4.5．不定冠詞が対応する場合

ここでは，それぞれの言語の定冠詞に別言語において不定冠詞が対応している例について考察する。イタリア語の定冠詞がルーマニア語の不定冠詞に対応している例は全体の 2.5％であり，ルーマニア語の定冠詞がイタリア語の不定冠詞に対応している例は 1.3％となっている[19]。以下にそれぞれの例

を示す。

I. イタリア語の定冠詞がルーマニア語の不定冠詞に対応している例

(40) a. Katov si alzava: andò a guardare il grillo
was standing up he went seeing the cricket
addormentato nella sua gabbiolina. (I p. 35)
slept in its small cage

b. Acum se ridicase de pe scaun ca să se uite la un
now he had stood up from chair so that he may look at a
greier aflat într-o minusculă colivie. (R p. 31)
cricket found in a small cage
"彼は立ち上がって，小さなかごの中で眠っているコオロギを見に行った。"

II. ルーマニア語の定冠詞がイタリア語の不定冠詞に対応している例

(41) a. Kyo alcătuise primul detaşament de legătură, care
had created first-the unit of liaison which
reunea o sută douăzeci de biciclişti. (R p. 38)
assembled a hundred twenty cyclists

b. Kyo aveva creato un primo reparto di collegamento formato
had created a first unit of liaison formed
di centoventi ciclisti. (I p. 41)
of a hundred twenty cyclists
"キョウは百二十人からなる最初の自転車連絡隊をつくった。"

[19] 本稿における分類でのイタリア語の不定冠詞の内訳には，いわゆる部分冠詞も含まれている。これは，定・不定という概念をもとにすると，不定冠詞が部分冠詞と同じカテゴリーに属すると考えられるからである。なお，ルーマニア語には不定冠詞複数形が存在する。これは名詞の複数形と共起し，不定数の非連続的な要素を示すもので，イタリア語の部分冠詞複数形に相当する。

既に述べたように定冠詞と不定冠詞は定性に関して対立する要素であり，本来対応することはまれであるように予想される。しかし，今回の調査によって得られた数値は決して低いと断言できるものではない。これは，言語運用において，定と不定という対立が絶対的なものとは限らず，若干の連続性をもっていると考えることができる。藤田（2016a）ではイタリア語とフランス語について，藤田（2017）ではイタリア語とスペイン語について，藤田（2018）ではルーマニア語とフランス語について，藤田（2019）ではルーマニア語とスペイン語についてそれぞれ定冠詞の分布の観察をもとにして，不定冠詞と定冠詞の機能は必ずしも相反するものではなく，両者の関係は連続的なスケールでとらえられるものであると論じている。同様の傾向は，今回の定冠詞の分布をもとにした観察からイタリア語とルーマニア語においても見られると言える。両者の割合を比較すると，ルーマニア語の方が不定冠詞で生起する割合が若干高いものの，顕著な差は見られないと言える。このことから，今回の調査の結果からは，両言語における定冠詞と不定冠詞との連続性において大きな違いは観察されないということになる。

ここで補足しておきたいのは，定で表すか不定で表すかという選択は，発話者，この場合は書き手の判断にゆだねられるという点である。言うまでもなく，翻訳とは一方の言語から他方の言語への機械的な置き換えではなく，翻訳の目標言語において自然な表現へと変換することがしばしば行われ，その判断は言語としての特質に基づいたものもあれば，翻訳者の文体的な志向に大きく影響を受ける場合もある。例えば，以下の例は後者に属すると考えられるものである。

(42) a. Non c'era nulla che stesse ad indicare la lotta,
not there was nothing that was indicating the fighting
(I p. 30)

b. Nimic nu arăta că acolo avusese loc
nothing not indicated that there had happened

o luptă. (R p. 24)
a fighting
“戦いのあとを示すものはそこには何もなかった。”

(43) a. Libertatea totală pe care o dobîndise îl lăsa pradă
freedom-the total which it he obtained him let prisoner
doar propriului mod de a gîndi. (R p. 77)
just his own way of thinking

b. una totale libertà lo asserviva totalmente al suo
a total freedom him submitted totally to his
pensiero. (I p. 72)
idea
“彼が手に入れた完全な自由が彼を全く思想のとりこにしている。”

(42)では，イタリア語では「戦い」をすでに言及されたものとして直接目的語に置いているために定冠詞が用いられているが，ルーマニア語では「戦いが生じた」という事態の発生を表す述語表現を選択し，「戦い」がその主語として置かれているため，不定冠詞が用いられている。また，(43)では，ルーマニア語テクストでは主語の「完全な自由」が関係節による修飾要素を伴っているために定冠詞が生起しているが，イタリア語テクストでは主語に指示対象を特定化する修飾要素が付加されていないために，対応する要素が，主語という位置は同じであるにもかかわらず，新出の要素として不定冠詞が用いられている。

両言語における定冠詞と不定冠詞の関係については，様々な角度から更に考察を進めなければならないが，そのためには複数のテクストからのデータ収集が必要となってくるため，今後の課題としたい。

5．結論

本節では，まずイタリア語とルーマニア語の定冠詞の分布についての総括を行う。続いて，今まで行ってきた他言語の分析を踏まえた上で，フランス語とスペイン語を加えた四言語間の定冠詞に関する総括を提示する。

5.1．イタリア語とルーマニア語についての分析の総括

イタリア語とルーマニア語における定冠詞の分布と他の要素との対応関係をもとに，両言語における定冠詞の特性を対照的に考察してきたが，両言語における共通点と相違点は以下のようにまとめられる。

共通点　ⅰ）指示性の高さという点において性質が異なる指示形容詞との機能分化が明瞭である。

ⅱ）定性の値が異なる不定冠詞との機能分化がある程度なされているが，定冠詞に不定冠詞が対応している例が一定数観察される。このことから，定冠詞と不定冠詞の間に若干の機能的連続性が存在すると考えられる。

ⅲ）ゼロ冠詞との交替が一定の割合で観察される。

相違点　ⅰ）ルーマニア語の定冠詞がイタリア語の所有形容詞に対応する例が一定の割合で観察される。これに対して，イタリア語の定冠詞がルーマニア語の所有形容詞に対応する例はそれほど多くはない。これは，ルーマニア語において所有の与格という構文が頻繁に用いられるという統語的特徴によるところが大きいが，与格人称代名詞が生起しない例も多く見られることから，ルーマニア語の定冠詞はイタリア語の所有形容詞の機能の一部をになっていると言える。

ⅱ）イタリア語の定冠詞にルーマニア語のゼロ冠詞が対応している例の方が，ルーマニア語の定冠詞にイタリア語のゼロ冠詞が対

応している例よりも多い。

iii）イタリア語のゼロ冠詞が対応している例が一定数見られるのは，ルーマニア語の定冠詞が格標示の機能，及び修飾要素が後続することを明示する機能を担うという，形態統語的な特徴によるところが大きい。これ以外の場合は，前置詞の目的語と名詞文という特定の統語的環境において一定数観察される。

以上の結果から，両言語の定冠詞は基本的な性質を共有しているものの，一部でその機能に相違点があると言える。所有表現については 4.3 で述べたようにルーマニア語の特異性が従来の研究において指摘されていたが，本論でそれが統計的に証明されたことになる。また，ルーマニア語ではイタリア語よりもゼロ冠詞の生起が多く観察されるという特徴が，本稿での調査によって確認された。この特徴は，同じロマンス諸語に属する両言語の相違点として注目すべき点であると言える。ただし，筆者の従来の研究で指摘されたイタリア語においてもゼロ冠詞の生起が決してまれではないという事実が，ルーマニア語と比べても確認された。他の要素，例えば指示形容詞や不定冠詞の生起例の割合に比べると明らかに高い数値を示しており，イタリア語においても一定の環境において比較的指示性の高い要素を指示する名詞がゼロ冠詞を伴うことが再確認されたと言える。

5.2. ロマンス語における定冠詞の分布に関する総括

ここでは，藤田（2016a），藤田（2016b），藤田（2017），藤田（2018），藤田（2019）と本稿での分析結果を突き合わせ，イタリア語・ルーマニア語・フランス語・スペイン語における定冠詞と他の決定詞との対応に関して，各言語間に見られる特徴を明らかにする。

まず，定冠詞に対してゼロ冠詞が対応している比率を見ると，ルーマニア語がどの言語と比較しても高くなっており，定である名詞句にゼロ冠詞を用いる傾向が最も高いと言える（対フランス語＋10.9 ポイント，対スペイン語＋10.6 ポイント，対イタリア語＋9.8 ポイント）。続いて高いのはスペイン

語で，ルーマニア語以外のいずれの言語よりも比率が高くなっている（対フランス語＋3.3ポイント，対イタリア語＋2.7ポイント）。これに続くのがイタリア語で（対フランス語＋3.2ポイント），フランス語がいずれの言語と比較しても最も低くなっている。すなわち，以下に示される関係となっている。

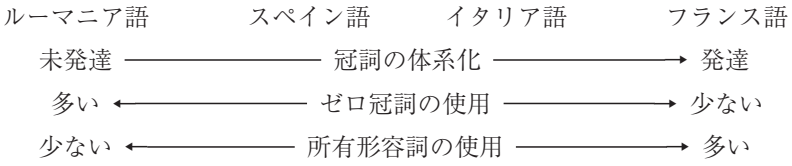
ルーマニア語　＞　スペイン語　＞　イタリア語　＞　フランス語

この事実は，それぞれの言語の特徴の差を反映していると考えることができる。まずフランス語は，部分冠詞という要素をもつことに象徴されるように，四言語の中で最も冠詞体系が発達しており，冠詞が生起する比率が高いと言える。イタリア語も完全な形ではないにせよ部分冠詞をフランス語と共有しており，フランス語ほどではないが冠詞体系が発達しているためにこの位置にあると言える。スペイン語は部分冠詞をもたないという点において上記二言語よりも冠詞体系が発達しておらず，その分ゼロ冠詞の使用が多くなると考えられる。最後に，ルーマニア語は修飾要素を伴わない名詞が前置詞に支配される場合に定冠詞が生起しないという固有の統語的制約をもっているという性質を有しており，冠詞体系が四言語の中で最も未発達であると言える。このため，ゼロ冠詞が極めて高い頻度で用いられることになる。

次に，定冠詞に対して所有形容詞が対応している比率を見ると，非常に興味深い傾向が観察される。ルーマニア語がどの言語と比較しても所有形容詞を用いる傾向が最も低く（対フランス語－5.7ポイント，対スペイン語－4.3ポイント，対イタリア語－3.7ポイント），続いてスペイン語がルーマニア語以外のいずれの言語よりも比率が低くなっている（対フランス語－4.5ポイント，対イタリア語－2.2ポイント）。これに続くのがイタリア語で（対フランス語－8.0ポイント），フランス語がこの場合もいずれの言語と比較しても最も高くなっている。すなわち，以下の関係となっている。

ルーマニア語　＜　スペイン語　＜　イタリア語　＜　フランス語

この傾向を，上で述べた冠詞体系の発達の度合いと関連付けて考えると，もっとも発達している言語ほど所有形容詞を用いる頻度が高くなっていると言える。これは，冠詞体系が発達すると，それぞれの決定詞の機能分化が明瞭となるため，それぞれの機能に対応する明示的な形式が用いられるためであると考えられる。つまり，本来定冠詞がになうべき無標の定の性質をもつ名詞句では定冠詞が用いられ，所有の意味を表すべき場面では所有形容詞が用いられるのである。これに対して，冠詞体系がそれほど発達していない言語では，このような機能上の境界がそれほど明瞭ではなく，定冠詞とゼロ冠詞，定冠詞と所有形容詞がそれぞれ共存する状況となっていると言える。まとめると，以下のように図示することができる。



指示形容詞と不定冠詞については，上記二要素ほど有意な差は認められなかった。指示形容詞と定冠詞の間には，5.1 で述べた指示性の高さという点で相違があり，その機能分化がいずれの言語においても比較的進んでいるためであると言える。不定冠詞については，5.1 で述べたようにいずれの言語においても定冠詞と若干の機能的連続性が存在するために両者の交替が観察されるが，言語間での差はそれほど見られないということであろう。

以上，本研究が進めたロマンス語間の対照分析によって，定冠詞と他の決定詞との関係に関する新たな知見を提示することができた。今後は，他の決定詞を中心に据えた対照分析を展開することによって，本研究の成果を検証する必要がある。不定冠詞を軸にした分析は，筆者がすでにいくつか行っているが網羅的ではない。また，所有形容詞，さらにはゼロ冠詞を軸にした分析には未着手であり，これらの分析を進めることが今後の課題である。

参考文献

Andorno, Cecilia (1999) *Dalla grammatica alla linguistica*, Paravia, Torino.

Carrera Díaz, Manuel (1985) *Manual de gramática italiana*, Editorial Ariel, Barcelona.

Dardano, Maurizio and Petro Trifone (1997) *La nuova grammatica della lingua italiana*, Zanichelli, Bologna.

Fujita, Takeshi (2013a) "Distribuzione sintattica dell'articolo indeterminativo in italiano e in francese", 『北海道大学文学研究科紀要』 第 140 号, pp. 99–129.

_____ (2013b) "Propiedades sintácticas del artículo indefinido en español y en italiano", 『北海道大学文学研究科紀要』 第 141 号, pp. 1–34.

Goga, Mircea (2001) *Limbă română — Morfologie Sintaxă Ghid de analiză morfosintactică*, Editura Limes, Cluj.

Guillermou, Alain (1953) *Manuel de langue roumaine*, Éditions Klincksieck, Paris.

Larousse (2003) *Gramática Italiana*, SPES Editorial, Barcelona.

Leeman, Danielle (2004) *Les déterminants du nom en français: syntaxe et sémantique*, Presses Universitaires de France, Paris.

Lombard, Alf (1974) *La langue roumaine*, Éditions Klincksieck, Paris.

Maiden, Martin and Cecilia Robustelli (2000) *A Reference Grammar of Modern Italian*, Arnold, London.

Negritescu, Valentina and Davide Arrigoni (2014) *Grammatica romena*, Ulrico Hoepli Editore, Milano.

Pană Dindelegan, Gabriela (2003) *Elemente de gramatică*, Humanitas Educaţional, Bucureşti.

Proudfoot, Anna and Francesco Cardo (2013) *Modern Italian Grammar*, Routledge, London and New York.

Renzi, Lorenzo et al. (2001) *Grande grammatica italiana di consultazione*, il Mulino, Bologna.

Sensini, Marcello (1997) *La grammatica della lingua italiana*, Oscar Mondadori, Milano.

Serianni, Luca (1997) *Italiano*, Garzanti Editore, Milano.

Trifone, di Pietro and Massimo Palermo (2000) *Grammatica italiana di base*, Zanichelli, Bologna.

藤田健（2016a）「フランス語とイタリア語における定冠詞の分布について」, 『北海道言語文化研究』 第 14 号（北海道言語研究会）, pp. 21–43.

藤田健（2016b）「フランス語とスペイン語における定冠詞の分布について」, 加藤重広・佐藤知己編著『情報科学と言語研究』, 現代図書, pp. 173–193.

藤田健（2017）「スペイン語とイタリア語における定冠詞の分布について」,『北海道言語文化研究』第 15 号（北海道言語研究会）, pp. 71–93.
藤田健（2018）「フランス語とルーマニア語における定冠詞の分布について」,『北海道言語文化研究』第 16 号（北海道言語研究会）, pp. 63–85.
藤田健（2019）「スペイン語とルーマニア語における定冠詞の分布について」,『北海道言語文化研究』第 17 号（北海道言語研究会）, pp. 81–103.

引用テクスト

André Malraux (1997) *La condizione umana*, Traduzione di A. R. Ferrarin, Bompiani, Milano.
André Malraux (1994) *Condiţia umană*, traducere Irina Eliade, RAO, Bucureşti.